



《日向ぼっこ》

(『少女画報』表紙絵・昭和2年4月号)

大正ロマンの世界へ

今年は、本市出身の挿絵画家「高島 華宵」の没後60年を迎えます。そこで今回は、芸術・文化の秋にもちなみ、大正時代を美しく彩った華宵の魅力と、今に残る大正ロマンの世界を紹介します。

略歴

1888年4月6日、宇和島市に生糸商の次男として生まれる。幼い頃から絵画に興味を持ち、画家を志して、14歳で上阪。日本画家の平井直水に師事し、15歳で京都市美術工芸学校（現・京都市立芸術大学）に入学。17歳で雅号を「花宵」とする。20歳で本格的に上京し、後に雅号を「華宵」と改める。

23歳となった1911年、津村順天堂「中将湯」の広告絵を描き、画家としてのチャンスをつかむ。その後、講談社の『少年倶楽部』に挿絵を描き始めたことを皮切りに、『少女画報』、『日本少年』など、さまざまな雑誌の挿絵や表紙絵を手掛け、大正から昭和初期の出版界で名をはせる。1931年ごろから挿絵の仕事が減らし、日本画制作に励む。戦後は児童向けの絵本などを手掛ける。

1966年の上京中に没す。享年78歳。



たかばたけ かしょう
高島 華宵

(1888年～1966年)

《馬賊の唄》

(『日本少年』口絵・昭和4年2月号)



《初夏の風》

(『少女画報』口絵・昭和4年5月号)



《薔薇の夢》

(華宵便箋表紙絵・大正15年)



「中將湯」広告絵
(大正15年頃)

《青い窓かげ》
(『少女画報』表紙絵・大正14年7月号)



《快步》
(『少女画報』口絵・大正15年8月号)

功績

少年・少女雑誌などから、魅惑的な少年少女を描いた数多くの作品を世に放ち、全国津々浦々に名前を知られる挿絵画家となる。

華宵が得意としたのは、モダンなファッションに身を包んだ美しい女性や少女、りりしく純粹で中性的な少年の絵画。その作品は大正時代の人々の憧れの的となり、華宵の妖艶で都会的な作品世界を意味する「華宵好み」という言葉が生まれるほどの一大フィーバーを巻き起こす。

華宵が描く少年少女の繊細な仕草や眼差しの美しさは、絵画のジャンルを越え、演劇・音楽・文学など、さまざまなカルチャーシーンで活躍する後世のアーティストへ影響を与えた。

《胡蝶》
(華宵便箋表紙絵・大正15年)



《山は紅に》
(『日本少年』表紙絵・昭和2年11月号)



《草の上》
(『少女画報』口絵・昭和3年4月号)



宇和島市立歴史資料館 宇和島市住吉町

市立歴史資料館は、明治17年に宇和島警察署として宇和島市広小路へ建設後、昭和28年の現愛南町西海地区への移築や市民の保存運動などを経て、現在の樺崎地区(住吉町)に移築・復元されました。建築様式は「擬洋風建築」に分類され、宇和島の大工たちが明治初期に和風建築の技法で西洋建築を模倣し、再現した様子を今に伝えています。文明開化を代表する建物としても重要な存在であり、平成8年には愛媛県で初の「登録有形文化財」に登録されています。

ここでは、宇和島の歴史や偉人に関わる展示を行っています。また、年に一度「高島華宵大正ロマン館」と共同企画する展覧会を開催しています。展示内容は毎年異なるため、華宵のさまざまな一面を楽しむことができます。



華宵の描く世界を味わう

令和8年度 展示

「華宵の部屋2026」美少年美少女幻影 —華宵さんってどんな人?—

今年の展覧会は没後60年を記念し、華宵の故郷・宇和島の人たちに改めて彼の作品世界や生涯を知ってもらうため、大人から子どもまで楽しめる内容の展示を企画しました。華宵が得意としたモダンなファッションに身を包んだ美しい女性や、りりしく中世的な少年を描いた作品を多数展示しています。高島華宵の世界をじっくりと堪能してください。

展覧会は10月18日(日)まで(入館無料、火曜日休)



《雨中の銃声》

(『日本少年』口絵・昭和5年6月号)

高島華宵大正ロマン館 東温市下林

華宵の魅力を語る



東温市の高島華宵大正ロマン館には、「華宵好み」の美人画や美少年画、当時の雑誌の表紙・挿絵など、大正ロマンの香り高い作品やコレクションが多数収蔵されていて、市立歴史資料館の展覧会にも毎年貴重な作品を提供しています。

展示スペースのほか、カフェスペースやミュージアムグッズの販売コーナーも併設されていて、華宵の世界にゆったりと没入できます。

華宵と大正ロマンについて、館長の高島 麻子 さんに詳しく聞きました

高島華宵大正ロマン館
館長 高島麻子さん



そもそも大正ロマンとは？

1970年代から80年代にかけて、美しかった大正の時代にロマンを求めたり、ノスタルジーを感じる風潮があり、その頃に生まれた言葉です。自分の親や祖父母が生きてきた時代を懐かしむ、今という昭和レトロの感覚に近いですね。

「大正ロマン」は例えば文学の分野ではノスタルジックで少し乙女チックなイメージを指す言葉でもあります。が、芸術やファッションの分野で、それらのビジュアルイメージを創り上げたのが高島華宵や竹久夢二といった当時の人気画家たちです。彼らの作品を観れば、私たち日本人

や現代人の中になんとなく刻まれている「古き良き時代」や「懐かしさ」を求める感覚を味わえると思います。

華宵作品の最大の魅力は？

まずは、当時最先端だった華やかな和洋折衷のファッションを鮮明に描いているのが一番の特徴です。西洋文化に憧れを持った当時の人々の想いを芸術によって代弁し、絶大な人気を得ました。今振り返っても、とてもお洒落で洗練されたスタイルですね。そこに少女少女たちの細やかな仕草や目線も相まって、メランコリックでセンチメンタルな世界観を美しく表現しています。

さらに、華宵の独特の表現として、両性具有的でジェンダーレス（中性的）な美少年や美少女を描いた作品が多く、観る人の心にザワッとする感覚を与えます。こういった稀有な美しさに強く影響を受けたのが、美輪明宏や寺山修司、唐十郎といった、1960年代以降の時代の先端を駆け抜けたアーティストたちです。

華宵の人となりは？

大正ロマン館には華宵が家族に宛てた手紙も多く残っていますが、それを読み解くと、「とにかく絵を描きたい」「自分の美を追及したい」といった性格・人間性が伺えます。それ以外の生活の面倒は、ほとんど周りに任せて、「とにかく自分は絵を描き、それを世間や世界に認められたい」といった強い意志を持っていたみたいです。

どこまでも芸術家気質な人柄でしたから、周囲の苦労もあつただろうと想像しますが、そういった揺るぎない情熱が数々の美しい作品を生み出したのでしょう。

高島華宵没後60年記念特別展

やなせたかしが見た
高島華宵の世界展



10月10日(土)～令和9年1月11日(月)祝

【開館日】

毎週土・日曜日、祝日(年末年始休)

午前11時～午後5時

岩松で太正ロマンを感じませう

2023年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された津島町岩松の町並み。江戸の終わりから昭和にかけて建てられた商家や蔵など、さまざまな年代の建物が入り交じり、歴史的風致を伝えています。そんなレトロ感漂う地区にたたずむ、大正ロマンスポットを紹介します。



阿部邸 ハルモニの家

かつて酒造業の蔵元だった阿部邸は、NPO harmonyのハルモニが「阿部邸 ハルモニの家」としてリノベーションし、カフェやマルシェ、民泊などの多様なコミュニティスペースとして親しまれています。

代表の松岡さんは、高畠華宵の作品の美しさにインスピレーションを受け、艶やかで上品な和洋折衷の衣装を着て岩松の町を歩いたり、フォトグラファーによる写真撮影を楽しめる体験メニューを企画しています。また、2025年には高畠華宵大正ロマン館とのコラボ事業「岩松大正浪漫プロジェクト」を立ち上げ、華やかな衣装でレッドカーペットを歩く「岩松レトロ浪漫街」を実施し、岩松の町をにぎわせました。

阿部邸 ハルモニの家

津島町岩松818番地3

【営業日】

火曜日～土曜日

午後1時30分～5時
(不定休)

Instagram



岩松を中心に活動するフォトグラファー 高本 詩真子 さんに話を聞きました

活動のきっかけ

もともと古い建物に興味があり、使われなくなった建物が時間と共に自然に還っていく姿を写真に残すことが好きでした。

宇和島には子育てをきっかけに約4年前にUターンしました。しばらくは子育て中心の生活に奮闘していましたが、岩松の町に足を運ぶ中で、ハルモニの家や地元の人たちとの関わりを続けて現在に至ります。

ハルモニフォト

岩松の花屋さん（フラワーショップたむら）・美容室（スタイリスト潤の店）と協働し、大正ロマンを匂わせる髪飾りのセレクトや着付け、撮影まで、まるっとプロデュースします。一人一人の個性や好みに寄り添ったスタイリングやスポット選び



harmoni__photo

などを心掛けています。日常にある風景の中で、特別な一日を共に創りたいという思いで活動しています。

これからの展望

活動する中で、地域の人にも興味を持ってもらい、撮影中に声を掛けてもらう機会も増えました。また、都会からの修学旅行生がハルモニの体験メニューに申し込んでくれるなど、多くのご縁を感じています。これからも人とのつながりを大切にしながら、時代と共に変わっていく岩松の町並みや人々の生活を、写真を通じて紡いでいきたいと思っています。





日本の伝統的な美
しさと華やかな西
洋文化の融合。大
正時代に築き上げ
た美しき和洋折衷
の文化は、宇和島
が誇る稀代の画家
「高島 華宵」に
よって現代に息づ
き、宇和島の魅力
と日常の豊かさに
彩りを添えます。

